月刊

立川と語ろう　立川に生きよう

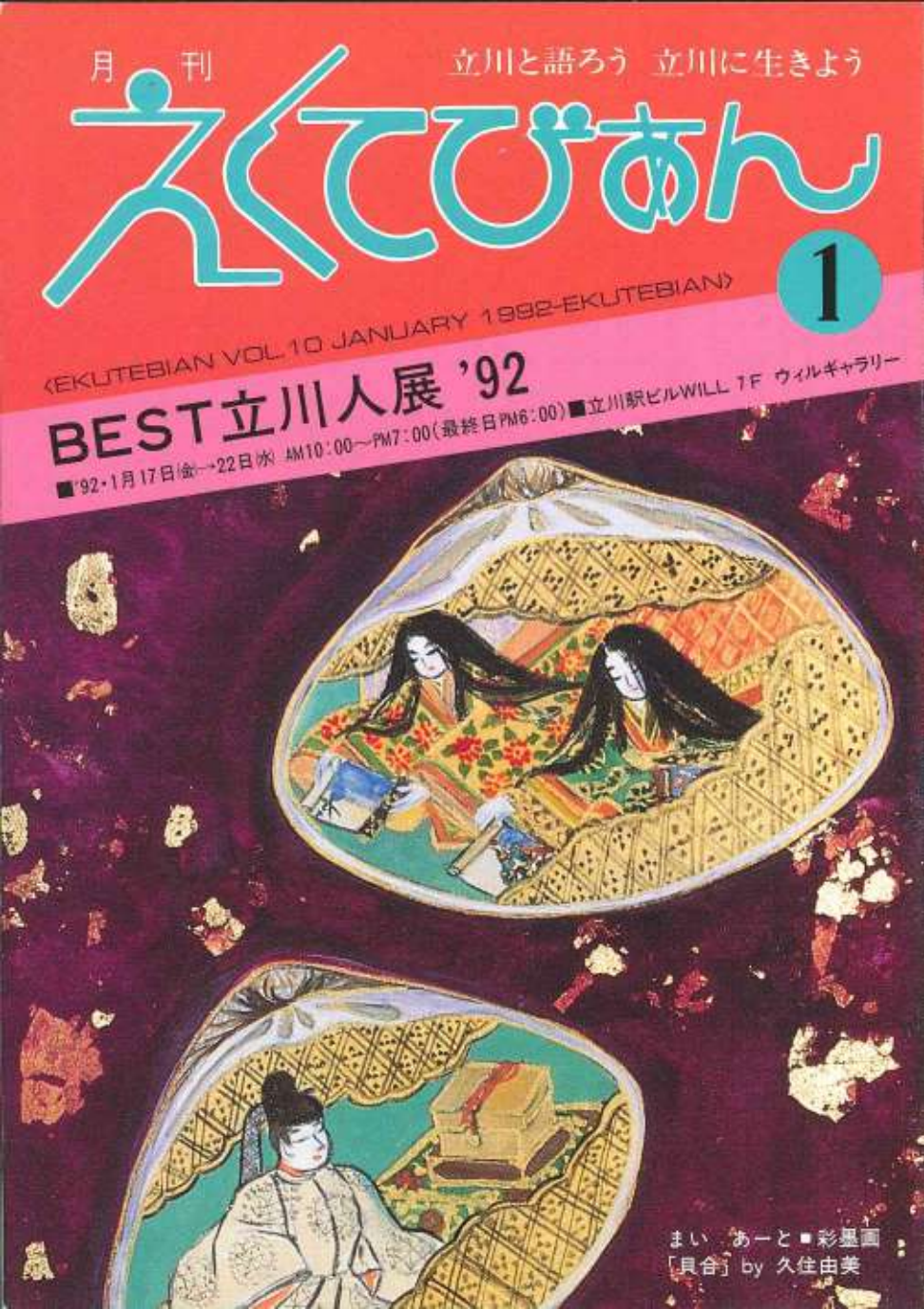
えくてびあん

1

〈EKUTEBIAN VOL.10 JANUARY 1992-EKUTEBIAN〉

BEST立川人展 '92

■'92・1月17日(金)→22日(水) AM10:00〜PM7:00(最終日PM6:00)■立川駅ビルWILL 1F ウィルギャラリー



まい　あーと■彩墨画
「貝合」by 久住由美

応援してください

REST 立川人展

'92・1月17日(金)→22日(金)
AM10:00〜PM7:00(最終日PM6:00)
立川駅ビル WILL
ウィルギャラリー(7F)

今年もBEST立川人展の季節になりました。編集工房は、立川人展の準備と月刊えくてびあんの編集とでてんてこ舞の大騒動です。これがまた楽しくてやめられません。おかげさまで今年もたくさんのパワフル立川人と出会うことができました。おおぜいの方々の応援をいただいて撮影も順調に進んでおります。(関連記事→中面トップ)

立川は、郵便局も頑張っている。ゴリラは、なんと立川郵便局郵便課の杉本盛久氏(中央)の手づくり。

シェタスケの、女コック、ますみちゃん。これは、お店のみなさんですが、きっとお客さんも応援してくれています。

二科展連続入賞の鉢呂さんのめずらしくなごんだ顔。仕事をする厳しい顔を見に来てください。

こんなすごい応援団を持っているのは、パワーリフティングの新田晃一くん。高校生No.1です。(前列右端)

絶妙な動きで、『寿限無』を披露する高座の花輪家水仙さんと立川落語会のみなさん。

今年もこんなに面白い人が輩出しました。文学賞もいただきました。新記録も出ました。立川人の表情をとらえた写真展。それが立川人展です

催 開 日 から 17

何か、変わったことをした人というより、周りの人の気持ちを明るくした人。こういう「立川人」を丹念に訪問。取材しました。写真も立川の名カメラマンが競って入魂のシャッターをきりました。その写真を一堂に集めて、来春、「立川人・展」を開催します。この写真展は早くも7回目を数えます。新年十七日から始まる恒例の立川人展、お見逃しなく！

まず、文学においては、「立川は児童文学が生まれやすい土地なのか」といわれる程、重みのある賞が2つとも立川在住の作家に輝いた。一人は赤い鳥文学賞受賞の清水たみ子さん（若葉町）。もう一人は、野間児童文芸賞受賞の森 忠明さん（曙町）。なお、森さんは、作品も立川が舞台。立川の新しい味わい方を童話の世界を通して見せてくれた。俳句では、小室藍香さん（柴崎町）が朝日俳壇賞を受賞された。

スポーツも花盛りである。全国中学バドミントン大会において、シングルの部、優勝の米倉加奈子さん（八中3年生）は、五輪強化選手として、中学生でただ一人、一般に混じって選出されている。カヌー・ナンバーワンの小林弘子さん（立高OB）もカヌー競技の日本参加が認可されれば、五輪代表の筆頭に上がっている。水泳では、宮内勤さん（砂川町）がマスターズ五十代の部、新記録達成である。百メートル競争のスタートダッシュのような全身の神経を集中する「百人一首」は、もはやスポーツと言っていいだろう。丸井美奈子ちゃん（立川市大山小学校四年）はその世界で早くも天才少女と噂されている。全日本女性チャンピオン（カルタ界のクィーン）も夢ではない。

長年の功績としては農業技術に寄与した鈴木藤太郎さん（富士見町）。拓本技術に深く業績を刻んだ小川準一さん（曙町）があげられる。

芸術部門でも頑張っている。二科展連続入選、個展開催と精力的に活躍されているアートディレクターの鉢呂祐二さん（錦町）は、写真に着色していく、ユニークな技法による着色写真「ポエグラフ」で今、マスコミから広く注目を集めている。新宿住友ビルの大壁画イルミネーションを描いて、話題を集めているのは板東慶一さん（柏町）。雄大で力強いウォールペインティングはネオン街新宿の中でもひときわ光っている。作家の人柄からなのだろうか？

ユニークなところでは、郵便局のジャンボアイドルを作り続けて十数年の杉本盛久さん（立川郵便局本局勤務）。青木市長も剣道の全国市長の中で最高段保持者として自ら登場。マラソンの野村夫妻（富士見町）。タイで植林した立川JCのメンバー14名。などなど。

一年のはじめのこの時にエネルギー・シャワーをいっぱいに浴びてみて下さい。

ことわざ問答 22

漢字一字挿入せよ

▼花おおければ●すくなし

▼意見と●はつくほど練れる

1月12日(日)
午後2時から
柳家小さん
親子三代落語会
於・市民会館大ホール
お問合せ・(26)1311

表紙は語る

まい　あーと■彩愛画
「貝合」by 久住由美

今回の作品は、「貝合（かいあわせ）」平安時代の、お姫さまたちは、こんな貝の裏に描かれた絵を合わせて遊んだのでしょう。

現代のトランプの神経衰弱と同じ要領の遊びです。見ているうちに、フッと手を出して裏返しにして見たくなりませんか？

「そんな私の部分を感じてもらえる絵を描きたい」と、作者の久住由美さんはおっしゃいます。

はじめ、源氏物語に現代と通じるテーマを感じ多く題材を求めてこられたのだそうですが、源氏物語の最終章『夢浮橋（ゆめのうきはし）』を描かれたとき、過去・現代・未来が一本につながっていることを感じ、最近現代画も描くようになったということです。

来年、2月20日から3月9日まで立川高島屋クリエイティブ工房で個展が開かれます。

実物の前に立つとさらに遠くを絵の中に見ることができるかも知れません。

ふれあい
さわやか
山梨中央銀行
＊立川支店＊
〒190 立川市高松町2-16-13
TEL 0425-26-1571

立川・トピックス

副都心新宿を立川人が光らせた

新宿の住友ビルの壁面にクリスマス向けのウォール・ペインティング（12月25日まで）が掛けられ人気を呼んだ。立川市柏町に住む、板東慶一さん（多摩美術大学テキスタイル学科3年生・24才）の作品である。去年の日本イラストレーション展で銅賞を受賞。それをきっかけにこの依頼を受けることになったそうです。

まず、グラフィックを描き、それを照明の専門家とイルミネーションに仕上げたのである。本来グラフィックは専門ではないとか。将来楽しみな、たくましい青年でした。

脳死を考える出版物「光はまだ消えていない」

日本でも脳死について語られる機会が多くなってきた。去る11月26日、日本救急医学会（理事長・杉本阪大教授）は、脳死を人の死と認め、脳死者からの臓器移植は妥当とする理事会見解を発表した。時代の流れは脳死を認める方向に向かっている。そのなかで、人工臓器の開発を先にすべきではないか？

そんな疑問と臓器移植の実状を、今だから知ってほしいと、移植の対象となり得る患者の立場から語った「光はまだ消えていない」が著者下田靖雄さん（立川市幸町・工学博士）によって出版された。考えさせられる1冊である。

立川クイズ

初まいり、年始、七草、エベス（エビス）講、昔の立川辺りのお正月はアレコレ行事が盛りだくさん。

でも、近頃まったく見られなくなったものもあります。そのひとつ「アボヘボ」、さてこれはどんな行事だったのでしょうか。

①お寺の和尚さんが新年のあいさつに壇家をまわる②子どもたちが門松やシメカザリなどを集めて燃やす③五穀豊穣を祈って作物に似せたつくり物を神様に供える。

〔12月号の答〕③

立川市内で測定されている地点で標高が最も低いのは錦町六丁目の多摩川の川原で、海抜約六十六メートル。最も高いのは西砂町四丁目辺りで約一二五メートル。標高差はおよそ六十メートルとなります。立川の街はおおむね北高西高型といえるようです。

真如苑だより

晴やかに平成四年を迎えさせて頂くにあたり、真如苑では例年通り大晦日にはどなたでも境内参拝の準備を整えお待ち申し上げます。（午後十時～午前一時）また除夜の鐘をつくことをご希望の方は当日までお申し出下さい。尚、つく方の人数に制限がありますのでご了承下さいます。

マッサラな（新）年が始まろうとしております。年の初めに真如苑でこころ静かなひと時をお過ごし下さい。

・日時　1月18日(土)　2時～4時

・本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

こたえ問答

花おおければ
実すくなし

うめの花を人間に、中身のないものに例えた。花が多くなればなるほど実の成り少ないのが通例。

意見と鍛れる
つくほど

自分はくせ、意見につけくせがつき練る。鍛えつくほど強くなる人の意見にはなるのが常識。

東風

この間、読者の方から「今度のジンテンはいつからですか」と尋ねられて嬉しかった。質問そのものが嬉しかったのではなく、ジンテンという表現に少なからず感動した◆ジンテンとは『ベスト立川人・展』の略称なのであった。編集部では、いつの間にかベストがとれて「立川人展」と呼ぶことが多いが、ジンテンとまでは略していない。ここまで略称あるいは愛称で呼ばれるようになれば、まずまず。この立川に根をおろしたのかなあと嬉しくなった◆ここまで来るのに七年かかった。はじめの年は「見本」がないので、取材に行っても疑われ、てんで相手にされない場面が続出したが、それでも二十数名がズラリ揃うと、ああ立川もまんざらじゃないなあ、と感慨にふけったものであった。しかし、めぼしい人が登場してしまうと、二年目からは難しくなるなあというのが内心であったが、二年目にも、ちゃんと「ベスト立川人」はいた。三年目も四年目も◆不運にも編集部は、この立川を「釣堀」かなにかのように、釣ってしまえば魚はいなくなると思っていたような節がある。しかし、立川はそんなスケールの小さい街ではなかった。大河のように洋々とした風格を備えて私たちの前にあった。数年後には、いまの『ベスト立川人・展』のスケールを恥じるようなものにしたいものだ◆えくてびあん　貰く棒も　無きままに

月刊えくてびあん　第90号
平成四年一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町1-37-303
磐城ビル3F　〒190
電話　〇四二五(28)0082
FAX　〇四二五(28)1297
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　湘大廣社
（編集）小川翔子　坂本弘子　鈴川　理　中村能雄　堀田悦子　本沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　栃橋一明　井上義治
スタジオ269　桂川一巳　本多　修

私の傑作選

NICE SHOT!

誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。

鈴木克吉さん
（柴崎町4丁目）
愛機➡ニコン801
■多摩川の朝

黒原京子さん
（曙町2丁目）
愛機➡ペンタックス
ズーム105－スーパー
■マリオ族と私
（於ニュージーランド）